

京都府のスズメ *Passer montanus* の鳥類標識調査情報

京都市山科区 須川恒(すがわひさし)

はじめに

この報告は、データベースを活かした京都府の鳥類標識調査の俯瞰 その6 中間報告 4として、タイトルにある「京都府のスズメの鳥類標識情報」について述べるものである(タイトルが長すぎると、目次編集者に迷惑がかかるので短くする)。

今回京都府のスズメについて鳥類標識情報から判る内容をまとめることになった。スズメについてまとめるのははじめてなので、まずその経緯を書く。

京都府における過去の鳥類標識調査情報のデータベースを山階鳥類研究所に請求して送ってもらい、京都府のレッドデータブック(第2版)の改訂作業に役立て 2021 年 3 月に京都府に改訂リストを報告した(今後府から公表される)。

京都府の多くの標識情報のうちレッドデータブックの改訂作業に役立った情報については別報にまとめた(須川 2021)。しかし京都府の標識情報には希少性の高い鳥種だけでなく、普通種についても多くの情報が含まれており、きっかけがあれば何かまとめたいと思っていた。

さて、大阪市立自然史博物館学芸員の和田岳さんが主催する大阪鳥類研究グループの今年の総会はコロナの対応のためオンライン会合となり、その中に基調講演として北海道教育大の三上修さんにスズメの講演をしていただくことになった。せっかくの機会なので研究グループの誰かがスズメの短報を発表すればと思って、熱心にスズメを調査している会員に発表を勧めたが、その方は当日ご都合が悪いとのことなので、それではと筆者が京都府のスズメの標識情報の俯瞰を急遽試みることにした。

50 年弱の京都府の鳥類標識調査のデータベースからスズメの情報を出すと 2429 レコードあった。これらの情報をいくつかの切り口から整理して紹介できそうだった。もっとも、標識時におけるスズメの年齢や性の識別についてはあやふやなので、日本鳥類標識協会のメーリングリストで経験者にうかがった。

2021 年 3 月 21 日に開催された大阪鳥類研究グループ 2021 年度総会では三上さんによる講演「スズメ研究のスズメ」があり、スズメの行動、減少、電線に止まる理由などについて講演いただいた(三上さんの本(三上 2013、2020)は講演後に図書館から借りて読んだ)。その後、会員からの講演トップとして筆者は 15 分間スズメについての短報を

PPT(スライドは 22 枚)を見せて話した。

このとき報告した内容と、終わってから多少追加や訂正した内容について紹介する。ただしスライドに使った画像はほぼ割愛し、表のみを使っての紹介である。

利用したデータについて

今回利用したデータの使用には山階鳥類研究所の許諾(許可番号:山階保全第 31-162 号)を得た。許諾を与えていただき、またデータ送付の労をとっていただいたことを感謝する。

10 年間別・月別標識情報数

京都府の標識情報の入り口として 10 年間別・月別情報数を表 1 に示した。これは希少種のデータを検討する際にもつくれた俯瞰するのに便利な表である。

表 1 京都府におけるスズメの 10 年間別・月別標識情報数

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79	1			26	4		3	1	15	2	27	3	82
1980-89	3	8	25	11	4	286	277	2	45	115	62	37	875
1990-99	3	2	8	1	1	151	348	89	79	21	18	15	736
2000-09			1	1	54	13	116	109	10	15	13	4	336
2010-19	23		14		6	133	69	109	13	6	26	1	400
計	30	10	48	39	69	583	813	310	162	159	146	60	2429

標識時の捕獲法はほとんどがカスミ網による捕獲で、一部には巣内のヒナへの標識もあったかもしれない。

月別に見ると各月に標識情報があるが、6~8 月が特に多い。年度別にみると、1970~79 年は少ない。バンダラの講習会は 1978 年からはじまり 1980 年代から多くのバンダラが増えて標識個体が増えた。

さて、1980~89 年代(875 羽)、1990~99 年代(736 羽)に比べて、2000~09 年代(336 羽)、2010~2019 年代(400 羽)と半減している。スズメの標識数が全国的に減少していることは、すでに明らかにされている(三上・森本 2011)。京都府の標識数においても同様の傾向を示したわけだが、これは京都府における標識調査の捕獲努力量を単に反映しているだけかもしれない。

三上らは、ほかの種も含めた総数との対比もしてスズメが減少していることを示している。そこで京都府における捕獲努力量の目安として、冬鳥だが捕獲数の多い 2 種につい

でも紹介する。ひとつは全国的に(だけでなく世界的にも)減少が指摘されているカシラダカ *Emberiza rustica* (例えば Edenius 他 2017)であり、もうひとつは、福井県織田山1級ステーションなど全国的にも秋の渡り期の増加が指摘されているアオジ *Emberiza spodocephala* (例えば米田他 2002)である。近年織田山では、特に10月末～11月はじめの「アオジ爆弾」を警戒してシフトを組んでいる状況となっている。

表2に京都府におけるカシラダカの、表3にアオジの10年間別・月別標識情報数を示した。

表2 京都府におけるカシラダカの10年間別・月別標識情報数

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79	24			8						2	3	15	52
1980-89	175	42	76	25						245	1211	261	2035
1990-99	24	10	17	5						157	493	68	774
2000-09	4	2	5	1						168	284	18	482
2010-19	2	2								9	106	11	130
計	229	56	98	39						581	2097	373	3473

カシラダカは京都府では1980年代から2010年代にかけて2035羽→130羽と激減している。

表3 京都府におけるアオジの10年間別・月別標識情報数

10年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1970-79				17	6					5	12	2	42
1980-89	81	57	78	56	22					53	434	103	884
1990-99	42	28	24	63	29					92	377	97	752
2000-09	43	28	46	27	70	1			1	764	2697	139	3816
2010-19	25	10	5	8	7				1	437	3222	40	3755
計	191	123	153	171	134	1			2	1351	6742	381	9249

一方、アオジは、京都府では2000年を境に752～884羽から3755～3816羽と激増している。やはり京都府でも、織田山で見られるような10月～11月の「アオジ爆弾」が見えてくるが越冬期の12月～3月はそれほど多くはなく2010-19年代は減少傾向を示す(京都府では繁殖の可能性が高い記録がなくなっていることがレッドデータブック改訂で課題となっている(須川,2021))。

調査者・調査地別のスズメの標識数

京都府内でスズメを多数標識した調査者(80羽以上、調査者名はイニシャル)別に月

別の標識数を、合計羽数が多い順に表4に示した。

スズメを 80 羽以上標識した人は7名いて、それらの上位7名の計は 2231 羽であり、京都府での標識総数 2429 羽の約 92%である。

表4 スズメを 80 羽以上標識した7名の調査者別月別標識数

調査者名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
SM					46	440	389						875
NM	6	9	24	7			8	2	63	91	60	37	307
MK			8		1	11	196	83				2	301
UM							155	50	48	8	2	3	266
SH						1	54	111	14		26	1	207
NS	22					120	1	19	7	15	5		189
NJ	1		12		1		3	29	8	6	26		86
上位7名計	29	9	44	7	48	572	806	294	140	120	119	43	2231
総計(全員)	30	10	48	39	69	583	813	310	162	159	146	60	2429

調査者によって月別標識数の傾向が違う。スズメを主たる目的とした調査か、一般的な鳥類調査の一部としてスズメも標識したのか、個々の方に詳しいことを聞きたいが連絡が取れない(取りにくい)人も多い。でも一部はわかりつつある。

NM、NJさん 河川敷などで小鳥類調査の際に標識されたものであろう

SH(これは筆者) 宇治川向島のヨシ原にできるツバメの集団ねぐら調査(6~9月)の際に、ツバメよりは早くねぐら入りするスズメが高く張ったカスミ網によく捕獲された。秋冬期の一般小鳥類鳥類調査の際にもスズメが捕獲された。

MKさん 自分がかかわる農地に集まるスズメに関心を持って調査をしたとうかがった。

SMさん、NSさん、UMさん 繁殖期のスズメが多くスズメを目的とした調査をされたようである。

スズメが多く標識された調査地

京都府の鳥類標識調査地(82ヶ所)のうち 300 羽以上標識された 24 ヶ所を標高順に配列した。そのうち表4で示した上記7名の調査地 5 ヶ所を表5の太字で示した。表5には、緯度・経度・標高・環境・主な調査者(イニシャル)、10 年間別の計を示している(辻本・須川 2020 の表1の一部を改変)。

標高順に高いところから天ヶ瀬ダム森林公園(UMさん)、上高野鳥脇町・木ノ下町(SMさん)、千代川代川町北ノ庄(MKさん)、城陽木津川西富野(NMさん)、宇治川向島(SH,NS・NJさん)である。スズメが多く標識されたのは里山、河川敷、農耕地といった環境で、当然のことだが標高の高い奥山の調査地で多く捕獲されることはない。

なお、表5にはでてこないが NSさんは宇治川向島以外に宇治市の市街地で 2015~

17年6月にスズメへ標識(総計140羽)をしておられる。

表5 スズメが多く捕獲された調査地(太文字:上位7名標識者の調査地)

緯度・経度・標高・環境・主な調査者、10年間別・月別標識情報数の計

標識調査地	緯度	経度	標高m	環境※	計	主な調査者	10年間別					
							1970-	1980-	1990-	2000-	2010-	
京都府南丹市美山町京都大学芦生演習林	35.33	135.77	756	奥山	9407	KA,AH,OT				6634	2773	
京都府京都市左京区大原大見町・尾越	35.20	135.82	706	奥山	2542	KK		7	227	2120	188	
京都府京都市左京区大原	35.12	135.85	506	奥山	1082	OY,SM		1081	1			
京都府京都市左京区鞍馬寺	35.12	135.77	458	奥山	4318	MK			1312	2835	171	
京都府南丹市日吉町天若	35.12	135.53	383	里山	1370	KA					1370	
京都府宇治市横ノ尾山天ヶ瀬ダム森林公園	34.87	135.83	298	里山	373	UM				373		
京都府京都市左京区上高野西明寺山	35.07	135.80	189	里山	15453	SM,OY		10086	4916	451		
京都府京都市左京区上高野鳥臨町・木ノ下町	35.07	135.80	189	里山	692	SM,OY			418	274		
京都府京都市左京区大文字山	35.02	135.80	187	里山	1748	KA,AH,OT		182		1566		
京都府京都市北区京大演習林上賀茂試験地	35.07	135.77	146	里山	314	AH,KA,				284	30	
京都府亀岡市千代川町北ノ庄	35.05	135.53	109	農耕地	724	MK				461	121	142
京都府京丹後市(竹野郡)丹後町袖志・経ヶ岬	35.77	135.22	102	半島	3102	OAKN,TR,MR			1583	953	566	
京都府京都市北区柴竹上堀川町鴨川御園橋	35.07	135.75	95	河川敷	863	SH,AH	12	593	150	108		
京都府亀岡市保津町保津川河川敷	35.02	135.58	90	河川敷	352	YA	284	68				
京都府京都市左京区北白川追分町京都大学	35.03	135.78	61	都市緑地	427	EY,MT,OT	17	321	56	33		
京都府舞鶴市沓島(緯度・経度訂正)	35.71	135.44	49	里山	1119	YA,SH	251	257	127	239	245	
京都府京都市上京区京都御苑	35.02	135.77	45	河川敷	398	FK,MK	2	1	193	202		
京都府八幡市橋本	34.88	135.70	45	里山	391	IT,OY	23	105	31	232		
京都府城陽市西富野	34.83	135.78	22	河川敷他	1776	NM,WH			1220	231	325	
京都府京都市伏見区向島上林町	34.92	135.77	11	河川敷	17995	SH,NJ,NS,AH,	800	3836	1039	6451	5869	
京都府八幡市八幡	34.88	135.72	11	河川敷	1479	IT,WT		17	336	803	323	
京都府宇治市小倉町巨椋池干拓地	34.90	135.77	9	農耕地	3698	NM,WH		155	3073	162	308	
京都府舞鶴市冠島	35.68	135.43	5	離島	1E+05	YN,SH,YA	41523	31376	15458	11819	8314	
京都府舞鶴市字三浜・小橋(緯度・経度訂正)	35.56	135.40	5	農耕地	370	SH,YN	88	207	38	37		

標高:緯度・経度からソフトで得た値、環境:地図画像による推定を含む

5~7月に多くスズメを標識したSMさんの調査地の環境は里山と推定したが、山裾の集落にある小緑地らしい。スズメが集まりそうな場所に網を張った調査と思われた。SMさんと親しいOYさんによると、SMさんは地域で信頼されている方だったので、そのような調査もできたとのこと。

スズメの齢・性の識別

スズメの齢・性の識別についてはあまり理解していなかったが筆者(SH)の207羽の記録がデータベースには残されていて、齢・性についての情報も記録されている。

齢・性が不明と思う場合はそう記入してよく、判断できると場合は記入している。でもその判断は間違っていたかもしれないと気にしだすときがない。

スズメの齢・性の識別については、バンダーのバイブルであるスベンソン(2011,p274)に、スズメの識別についての基礎的な情報がコンパクトに掲載されている。齢は羽衣でわかり、換羽後でも秋なら頭骨骨化が使える(Cランク)。

性は繁殖中では総排泄口突起が使えるとあるが、難しそうに感じる。

とりえず京都府の標識情報を齢・性別に整理すると表 6 のようになる。

記録に雄？や成鳥？のように？がついている場合は性不明、齢不明とした。

J 幼鳥というのは、幼羽を確認してという場合もあるが、1W(第1回冬羽)、1Y といった記録の個体も含め、おおむね孵化後1年という意味である。1S(第1回夏羽)があればここに含めてまとめている(1S の記録はあまり多くない)。

表6 スズメの年齢(成鳥か幼鳥か)別・雌雄別標識数

性\ 齢	A 成鳥	J 幼鳥	U 不明	総計
F 雌	81	10	1	92
M 雄	49	2		51
U 不明	286	1818	182	2284
総計	416	1830	183	2429

齢(A か J か)の識別数は多い(齢識別 92%、齢不明 8%)。一方、性の識別数は少ない(性識別 6%、性不明 94%)。

日本鳥類標識協会のメーリングリストに 2021 年 3 月 2 日に「スズメの雌雄判別」とのタイトルで「私はスズメを捕獲した際に、～という点で成幼を判別し、雌雄はこういった点で判別しているといった情報を知りたいです。あるいはスズメは全部 UJ か UA にしているとかといったことも知りたいです。」と問いかけたところ、3 月 5 日にかけて、全国の数名の方々からとても興味深いお返事をいただきました。

研究対象となる場合 DNA で雌雄判別されたスズメなのだが、計測値や喉の黒パッチ(雄は大きい雌の重なりあり)、嘴の色(成鳥でも非繁殖期に黒に黄色が混じる)などについての論文を紹介いただいた(Matsui 他 2017; 玉田他 2019)。

また、最近受け取ったスズメのケージ内繁殖に成功した富山の大田保氏の報告集の中に雌雄判別情報がまとめられている(大田 1991)。抱卵斑は雌のみとのことだが、雄も昼間雌にかわって抱卵するとのこと。スペンソンが書いている総排泄口の断面による判別は試みたが不可能だったとのこと。

スズメは虹彩色では齢の違いでどうなのか、あるいは恥骨間距離(雌が幅が広い)は雌雄判別に使えるものなのかなど、よくわからない。頭骨利用は難しいという人もいる。

スズメの雌雄を判別したのがどの季節かがわかるように、スズメの齢(成・幼・不明)別・性別(雌・雄・不明)・月別の標識情報数を表7にまとめた。

雌雄別の数が多いのは成鳥の6~7月(太字で示した)である。どんなポイントで判別したかの情報はデータベースからは判らない。OYさんによるとSMさんは繁殖期には抱卵斑の有無(雌が発達)で雌雄を判別していたとのこと。

月別の幼鳥率(齢不明を除き、幼鳥/(幼鳥+成鳥))も併せて示した。繁殖期の5月から幼鳥率が高まり、11月12月と幼鳥率が減少するのは、冬期の幼鳥の死亡率のためか移動(例えば暖地への)のためだろう。

表7 スズメの齢(成・幼)別・性別・月別の標識情報数

齢	性	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
A 成鳥	F 雌	1		4	1	5	42	26	2					81
	M 雄	1		4		1	25	12	2		1	2	1	49
	U 不明	3	2	8	25	14	41	74	28	5	18	38	30	286
	小計	5	2	16	26	20	108	112	32	5	19	40	31	416
J 幼鳥	F 雌					5	4					1		10
	M 雄									1			1	2
	U 不明	20		10	1	42	471	690	275	122	121	57	9	1818
	小計	20		10	1	47	475	690	275	123	121	58	10	1830
U 不明	F 雌					1								1
	M 雄													
	U 不明	5	8	22	12	1		11	3	34	19	48	19	182
	小計	5	8	22	12	2		11	3	34	19	48	19	183
計	F 雌	1		4	1	11	46	26	2			1		92
	M 雄	1		4		1	25	12	2	1	1	2	2	51
	U 不明	28	10	40	38	57	512	775	306	161	158	143	58	2286
	小計	30	10	48	39	69	583	813	310	162	159	146	60	2429
幼鳥率(%)		80.0%	0.0%	38.5%	3.7%	70.1%	81.5%	86.0%	89.6%	96.1%	86.4%	59.2%	24.4%	81.5%

ただし1月の幼鳥率が高かったのは少し気になる。齢の判定技術が向上し例数が増えれば傾向はもっと明瞭になるかもしれない。

スズメと対照的に、カシラダカでは齢・性の判別された情報が多い。

表8 カシラダカの年齢(成鳥か幼鳥か)別・雌雄別標識数

性\齢	A成鳥	J幼鳥	U不明	計
F 雌	554	1677	21	2252
M 雄	379	736	15	1131
U不明	25	67	15	90
計	947	2480	41	3473

齢(AかJ孵化後1年以内)が識別された割合は高く(99%、不明1%)、性の識別された割合も高い(97%、不明3%)。スベンソン(2011)は羽衣の図示もして、羽衣から性・齢が識別できることを示している(判断の難しい境界はあるが)。このような識別ポイントは多くのバンダーが習熟していると思われる。

オンラインの講演中に三上さんから「スズメのAとJの割合で経年変化あれば、Jが減っているかわかったりしないでしょうか」とオンラインのチャットで質問があった。三上さんはスズメの家族群における幼鳥を調査することからヒナの産出を調べて近年の減少傾向を裏付けている。そこで急遽ピポットテーブルで集計して返事をしたのが表9である。

1970年代は本格調査の前だから抜くとして、Jの割合は1980~1999年は82~86%、半減した2000~2019年は79%と若干の減少が認められた。

表9 スズメの10年間別幼鳥率

10年間	A	J	U	計	J/(J+A)%
1970-79	25	14	43	82	35.9%
1980-89	145	646	84	875	81.7%
1990-99	93	595	48	736	86.5%
2000-09	68	261	7	336	79.3%
2010-19	85	314	1	400	78.7%
計	416	1830	183	2429	81.5%

こうなればと、講演後に激減したカシラダカと、秋の渡り期に増加したアオジも幼鳥率が気になり集計してみた。

表10 カシラダカの10年間別幼鳥率

10年間	A	J	U	計	J/(J+A)%
1970-79	30	19	3	52	38.8%
1980-89	528	1479	28	2035	73.7%
1990-99	224	543	7	774	70.8%
2000-09	128	347	7	482	73.1%
2010-19	37	92	1	130	71.3%
計	947	2480	46	3473	72.4%

カシラダカの標識数は激減中だが幼鳥率(1970~79年代除く)は71~74%をうろうろで意外と変化していない。

アオジは表11のように、1980~1999年までの幼鳥率は35~51%と低かったが、秋の渡り期に増加した2000~2019年は64~63%と増加した。

表11 アオジの10年間別幼鳥率

10年間	A	J	U	計	J/(J+A)%
1970-79	20	14	8	42	41.2%
1980-89	409	424	51	884	50.9%
1990-99	477	263	12	752	35.5%
2000-09	1342	2432	42	3816	64.4%
2010-19	1222	2526	7	3755	67.4%
計	3470	5659	120	9249	62.0%

アオジの秋の渡り期の増加に対応する、どこかの繁殖地でヒナ数の増加があったということだろうか。北海道でも確か同様のアオジの秋の渡り期の増加はあったと思うが、営巣地調査ではアオジの営巣数は減少しているとのこと(藤巻裕蔵さん私信)。また、スズメやカシラダカより幼鳥率が低いのも謎である。「アオジ爆弾の謎」解明の情報募集！

スズメの再捕獲記録(Rp, Rt, Rc)いろいろ

再捕獲情報には以下のようにいろいろとある(系統的俯瞰法は模索中である)。

Rp リポート(同一調査地での6ヶ月以内の再捕)

Rt リターン(同一調査地での6ヶ月を越える再捕)

Rp は調査地への滞在特性を Rt は帰還特性を反映している情報と理解できる。

Rc リカバリー(回収)(5 kmを越える地点での再捕)は以下のようなカテゴリーで提供される。

- ・京都府内の調査時に回収されたもの
- ・京都府内で放鳥し府内で一般回収されたもの
- ・京都府内で放鳥し京都府外で回収されたもの
- ・府外の他地域放鳥、京都府で一般回収されたもの

スズメの Rp と Rt の経過月数

京都府のスズメのリポート記録の放鳥月・経過月別数を放鳥時の齢別に分けて示す。

表 12 京都府のスズメの Rp リポート記録の放鳥月・経過月別数

経過月	放鳥月(放鳥時幼鳥)							計	放鳥月(放鳥時成鳥)			
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	経過月		7月	8月	計	
0	16	2					18	0	1		1	
1	1	3	1			2	7	1	1	1	2	
2			1	1			2	2				
4						1	1	4				
計	17	5	2	1	2	1	28	計	2	1	3	

放鳥時齢別の表(齢はUだった1例は除く)

6月～11月に放鳥した幼鳥 28羽は0～4ヶ月内に同一調査地で再捕された。また7～8月に放鳥した成鳥 2羽は0～1ヶ月内に同一調査地で再捕された。

京都府のスズメの Rt 記録の放鳥月・経過月別数を表 13 に放鳥時の齢別に分けて示す。

表 13 京都府のスズメの Rt リターン記録の放鳥月・経過月別数

経過月	放鳥月(放鳥時幼鳥)				経過月	放鳥月(放鳥時成鳥)			
	3月	6月	7月	計		3月	6月	7月	計
8					8		1		1
11			2	2	11				
12		1	6	7	12			1	1
15					15	1			1
22					22	1			1
23			1	1	23				
37		1		1	37				
計		2	9	11	計	2	1	1	4

幼鳥放鳥は37ヶ月後の再捕がある(3年生存例)。成鳥放鳥は22ヶ月の再捕がある。

これは2年弱だが放鳥時成鳥ということで、ほぼ3年の生存例である。

京都府のスズメの Re リカバリー(回収)情報

5 km以上離れた場所での再捕情報であるがいくつかのカテゴリーに分かれる。

- ・他地域(京都府別調査地)放鳥→京都府調査時回収はなかった。
- ・京都府放鳥→京都府回収(一般回収)は4例あった。

いずれも標識した調査地から7 kmの範囲内の農耕地で、5~15ヶ月内に狩猟(無双網)で同じ人が捕獲回収された。宇治川発は近くの巨椋干拓地で、亀岡発も近くで捕獲回収されている(ありがたいことに、いずれも回収記録を連絡いただいている)。

- ・京都府放鳥→京都府外回収(一般回収含む)はなかった。
- ・他地域放鳥→京都府回収(一般回収)

石川県加賀市河川 1985年8月に放鳥された成鳥1羽が4ヶ月後京都府八幡市(167 km)で回収された。一例だが、幼鳥は移動し、成鳥は定着のイメージに反する例である。

環境省鳥類アトラスの Web版(スズメ)を以下から見るができる。

http://www.biodic.go.jp/birdRinging/atlas/Passer_montanus/Passer_montanus_wamei.html

このアトラスで目をひくのは黒田長久(1966)の報告による戦前(1924~'43)のスズメの標識回収情報である。農林省の新潟県福島潟に近い北蒲原郡葛塚村で 5798羽放鳥(年齢不明)して東海など南の各地で 157羽が回収された。スズメの幼鳥の多くは南方へ流れていくというイメージができた図である。ただし放鳥時の年齢は不明で、推測である。

スズメのアトラスで注目されるのは北陸の調査である。石川県加賀市(石川県南部)の山本芳夫氏の調査で京都への南下例があった。また、石川県北部や富山県放鳥個体が、少数だが石川県南部や福井県といったへの南下例を示している。

京都の伏見稻荷大社裏参道のスズメの焼鳥(寒すずめ)

京都でスズメというと、猟期(11~2月)に伏見稻荷裏参道のいくつかの店を出されているスズメの焼鳥(寒すずめ)がよく知られている。京都・香川・長野・新潟から入荷とのこと(ネット情報)。京都の狩猟者から入手した可能性はある(提供することは合法的)。店先でどこから届いたかは確認していないが宅急便の箱から出したスズメの羽を女店員がむしっている姿を見たことはある。2羽刺しで 500円(当時)。焼き鳥はコンガリと焼けていて頭ごとばりばりと食べることができる(図1)。2012年1月11日に龍谷大学深草学舎での講演前に案内した沖縄大の盛口満氏は、スズメの食後、自分のホネコレクション用にもう一セット買われたので驚いた。

伏見稲荷神社は水田耕作の生産力が背景にある神社なので、スズメは米作の害鳥として食われるという文化がある。



図1 ムライ(2017)京都ご近所物語(2月 p142)より

(姪のムライからは掲載の了承を得ている。筆者は4月(p13)におじさんとして登場し、12月(p120)では筆者の妻(おばさん)が登場している)。

スズメが食われる文化という紹介だけでは一方的なので、筆者は学生への講義では、伏見稲荷の近くには「すずめのお宿」をつくっている愛鳥家がいたことを紹介した。戦前の話なのだが、伏見稲荷大社前から伏見街道を約500メートル南へ行った辺りの鍵本さん宅ではヒナをへビから守るため、穴を開けたヒョウタンを針金でたくさんつるして、スズメの巣箱となっていた。ヒョウタンの数は何百とあり、軒先にずら一つと残っていたそうである(中西悟堂著に紹介があるとのこと)。このスズメを守るヒョウタン(瓢箪)を記念して近所の和菓子屋の栄泉堂は「深草雀」「瓢箪雀」といった菓子をつくった。深草雀は、もちとあんでできた玉を、薄く焼いた皮で包んで、丸々としたスズメの形がかわいらしい。

寒すずめを食べる文化も続いてもいいとは思っているが、大きな瓢箪をぶらさげてスズメの営巣を助けてやるような文化も復活させたい。もちろんスズメのヒナへの標識が可能なデザインのパトロール箱を考えることができればと思う。

まとめ

- ・京都府のスズメは50年弱で2429羽の標識情報が得られた。1980年1990年代に比べて、2000年2010年代は半減していた。
- ・齢の識別数は多い(92%)が、性の識別数は少ない(6%)。スズメの齢・性の識別ガイド充実が課題。
- ・幼鳥率は1980年1990年代82~86%、標識情報が半減した2000年2010代は79%と若干減少した。最長37ヶ月後(幼鳥時標識)のリターン記録があった。
- ・京都府内で狩猟捕獲により回収された個体が4例あった。石川県において成鳥で放鳥

された個体が府内で1羽回収された。

・スズメの標識調査を通して、スズメの文化の世界とつながるかもしれない。

文献

Edenius L, Choi CY, Heim W, Jaakkonen T, Jong DEA, Ozaki K, Roberge JM (2017).

The next common and widespread bunting to go? Global population decline in the Rustic Bunting *Emberiza rustica*. *Bird Conservation International* 27: 35–44.

大田保文(1991)スズメ *Passar montanus* の雌雄判別の糸口を探る. 富山県生物学会誌 31号:36-42.

米田重玄・上木泰男(2002)環境庁織田山一級ステーションにおける標識 調査-1973 年から 1996 年における定量的モニタリング結果. 山階鳥研報,34:96-111.

須川恒(2020)データベースを活かした京都府の鳥類標識調査の俯瞰 その1 前史編. *Alula* No.60(2020 春):45-55.

須川恒 (2021) 京都府レッドデータブック改訂のための鳥類標識情報と課題 *Alula* No.62(2021 春):**-**.

須川恒・辻本大地(2020a)データベースを活かした京都府の鳥類標識調査の俯瞰 その2 構想編. *Alula* No.60(2020 春):56-67.

須川恒・辻本大地(2020b)データベースを活かした京都府の鳥類標識調査の俯瞰 その3 中間報告1. *Alula* No.61(2020 秋):18-35.

玉田克巳・池田徹也(2019) 北海道のスズメにおける嘴基部の色の季節変化と外部計測値による性判定の可能性. *日本鳥学会誌* 68(2): 349–355.

辻本大地・須川恒(2020) データベースを活かした京都府の鳥類標識調査の俯瞰 その4 中間報告2 調査地の概要紹介と、集計・分析についての重要性の考察. *Alula* No.61(2020 秋):36-43.

Matsui, Shin Satoe Kasahara, Takahiro Kato, Hiroe Izumi, Gen Morimoto, Keisuke Ueda, Osamu K. Mikami(2017) Badge size of male Eurasian Tree Sparrows *Passer montanus* correlates with hematocrit during the breeding season. *Orni.Science*16(1)87-91.

三上修(2013)スズメーつかず・はなれず・二千年. 岩波書店.

三上修(2020)電柱鳥類学 スズメはどこに止まっている?. 岩波書店.

三上修・森本元 (2011) 標識データに見られるスズメの減少. *山階鳥類学雑誌*, 43(1): 23-31.

ムライ(2017)京都ご近所物語. イーストプレス. <http://matogrosso.jp/kyoto-gokinjo/01.html>